「Who are you. Mr. Winter Tree」

〜ゴッコがうまく踊れない〜

かわしまかつみ

登場人物

安西夏実(３９)　アマ演劇団
西　冬木(４２)　アマ演劇団【自称・異星人】
よしこ(４５)　ドラッグストア店員
みどり(４８)　同　店員
サーヤ(２１)　同　学生バイト
店長　(４３)　同
猛　(１９)　同　学生バイト
男　(５５)　猛の父親
永峰（５８)　物流センター課長代理
サユリ(２２)　アマチュア劇団員
佐々木(３８)　物流センター従業員

演出家（声）
夏実の父（声）
夏実の母（声）
夏実の幼少時（声）

他、物流センター従業員、数名

概略

主役を外され意気消沈のアマチュア劇団員の独身女性、夏実（３９）に、独身男性、冬木（４２）が２人芝居をしないかと提案。
二人芝居『芝居より楽しく生きようよ！』を演ずるため２人は先ずは経験が必要、絶対　　条件と「私たちは大人なんだから」と、いとも簡単に同棲生活（擬似夫婦生活）を始める。
実践開始、人並みを目指して２人は正規の職を求め、お金を得ようと頑張る。
両親に大切に育てられた夏実は元来、仕事となると躓き、うまく出来ない性質。だからこそ、お金を求めず、好きな芝居に熱中していた。
一方、芝居好きが興じて、家庭も持たずパート勤めで時間を作り演じることを楽しんでいた冬木。
その２人が方向転換、【人並みの生活】に向けて。
本当にうまく行くのか……。
やがて、すれ違いばかりの２人には、会話の時間さえも無くなる。
夏実は、仕事の失敗続きで、精神がズタズタ、気分障害が精神を蝕んでいく。
冬木は、昼夜交代業務で負けじと頑張りすぎて身体を壊し始める。
夜勤明けで疲労困憊の冬木が、帰ってきた時、現実を見ることになる。
夏実が隅で固まっている。鬱で動けなくなっていた。

なんてことだ、金も時間も、そして、ゆとりも得て安らぐ？
そんなもんは幻想だ！出来るはずがない！
僕たちには出来ない。
僕たちには「僕たちの分相応な生き方しか出来ない」のだ。
もう、真っ平ご免だ！
冬木は、かつての彼のように、優しく夏実を抱きしめてやる。
最後の〈不思議な力〉を使って。
夏実は快復するが、その代償に生きる時間が制限されてしまった冬木。
ーーー何故？
「どうして？あなたは西冬木さんでしょ？」
疑似夫婦生活で得た情感が夏実を惑わせる。
が、身寄りのない夏実、唯一、共に暮らした彼を、さらに愛するようになる。

冬木は異星人だったのだ。

	地球人と異星人、２人は最後で最初の２人芝居のために練習に励み続ける。 そして、本番に挑み、冬木は愛を育んだこの地球で幕を閉じ、夏実は新たな幕を開ける。

『Who are you. Mr. Winter Tree』
～ゴッコがうまく踊れない～

◯舞台（練習場）
真っ暗。
スポットライトが夏実(３９)を捉える。
夏実 「残ったのはたった一人、私だけ。全ては終わった。この先やるべきことはない。なん、に、も、な、い。死、死があるのみ。そう、生きてることに意味はない。死ぬべきなんだ」
下手、手前の椅子に腰掛け思案する。
夏実「……生きるべきか、死ぬべきか……ブツブツブツブツ……」
スポットが消え、闇にー。
演出家の力強い声が叫ぶ。
演出家(声)「配役はこれで行く！以上」
ショック音が響く。
暗転。

◯稽古場（市民ホールの一室）
しばらくして、
スポットが夏実を照らす。
先程と同じ位置、そこには正気を失い、
項垂れている彼女がいる。
後方にホワイトボードと、
片付けられた講義テーブルがある、
殺風景な一室である。
そこへ、ピポパピポ、ピポパピポ
（未来を感じさせる音の繰り返し）
ピポパピポが反復しながら徐々に、
大きく響くと共に、
上手、奥の一部が明るくなっていく。
中年男、冬木（４２）が現れる。
下手、手前の夏実が、
気になるらしくチラホラと
様子を伺っている。
意を決っして近付いて行く。
それに連れて、未来音も消えていく。
冬木 「（後方から）あの……」

夏実、振り返る。
夏実 「……（一瞥するだけ）」
冬木 「……あのォ……」
夏実 「なに！」
冬木 「あのう……うまい、上手ですよ」
夏実 「（無視）」
冬木 「大丈夫ですよ」
夏実 「何が！」
冬木 「次、あるじゃないですか」
夏実 「なに、言ってんの！次って何なの！」
冬木 「ゴメン、ゴメン！そういうつもりじゃ」
夏実 「じゃ、ナニ！なんなの、何！」
冬木 「そうじゃなくて……」
夏実 「ったく。アッチ行っててよ」
冬木 「ちょっと、ストップ、ストップ。落ち着いて下さいよ」
夏実 「ンンンゥン！苛つかせるのは、アンタよ！」
冬木 「ゴメンなさい。気を静めて下さい。とにかく、安西さん。落ち着いて下さい、ね。（と、徐に深呼吸を始める）スー、ハー、スー、ハー……」
夏実 「えっ！何……？気持ち悪ぃ。ね、ねー、もーう、邪魔しないでよ。終わったんだから、サッサと帰ってよ！」
【music・冬木登場時の未来音が微かに流れ始める】
構わず続けている、
冬木 「スー、ハー、スー、ハー、じゃ、どうぞ、御一緒に」
夏実 「な、な、何よ。何言ってんの！」
冬木 「スー、ハー、スー、ハー、スー、ハー、落ち着きます。スー、ハー、スー、ハー、気が静まります」
夏実 「ワケねえだろ……（と、言いながら、やり出す）スー、ハー、スー、ハー、スー、ハー……」
リラックスしてきた夏実。
【music・いつの間にか消えている未来音】

冬木 「安西さんって、いいなぁ。強気で、尖っ
ててさぁ。僕には無いんだ。そう云うところ」
夏実 「何、言ってんの！」
冬木 「いえいえいえ……えー、入り込んだら
手に負えない。相手のことなんかしっちゃー
いない。一人で芝居しちゃってさ、超夢中。
で、突然さ、リアクション悪りぃ、台詞覚え
ろって、なーんて、ズバズバ云ってさ。アマ
なのにさ。でも、そこがいい」
夏実 「何、分析してんの！放っといて！」
冬木 「だから、演技が上手い！」
夏実 「……フーーン」
冬木 「なのに、残念……主役、外された」
夏実 「（詰寄り）ったく、何が言いたいの！」
冬木 「（後退り）相手を困らせてしまう」
夏実 「うるさいうるさいうるさい、そんな事
アンタに言われなくても、分かってるわよ…
…もう……（涙が滲んでくる）」
冬木 「！？ア、ウ、あっ、あの、安西さん、
ごめん、そんなつもり……」
夏実 「そうでないと、詰まんないのよ……リア
ルじゃないと。ウソはキライ」
と、しゃがみ込む。
見守る冬木、暫く行ったり来たり。
夏実 「（呟く）……でも、そうかもねぇ」
冬木 「（顔色を確かめ）安西さん……」
夏実 「サユリちゃん、どうしてるかな…」
冬木 「サユリちゃん？」
夏実 「向いてないだなんて、偉そうに、ほんと
バカね……情けない」
冬木 「気にしちゃ駄目です。打たれ強くないと、
芝居なんてできませんよ」
夏実 「あの子のレール外しちゃったンだよね。
私がさ……」
冬木 「ううん。サユリちゃんが決めたことだ。
彼女は彼女なりに歩いていきますよ」
夏実、独白へ、
「…引きこもりだった、私を、助けてく
れたのがお芝居なの。一人っ子だった私は、
お父さん、お母さんに甘えっ放し。何でもし

てくれたわ。お絵描き、トランプ、縄跳び、パンを焼いたり、クッキー、作ったり、それから、お買い物に行ったり、遊園地に、ハイキングに、ドライブも楽しかったわ。一人の時は本を読んでたの……だから、友達は居ないし、居なくても平気だった。お父さん、お母さんが居るだけで、とっても安心、心地よかった。でも……でもさ、お父さんは交通事故であっという間に死んじゃった。それから……お母さんも追いかけるように、死んじゃった。衰弱しちゃってさ、まさっかて、感じ……引き篭って、本に浸かり放し……気が付いたらさ、妄想に酔ってさ……セリフを喋り、立って、動いて、踊ってるのよ、私が。とっても気持ちいいの。別の自分がフワーッて浮いてるみたい。イイなーって。そのうち、心が落ち着き、元気になってきちゃったの。だから、芝居が私を救ってくれた……」

冬木 「だったら、尚更、辞めるなんておかしいよ」

夏実 「そして……芝居が私をのぼせ上がらせたの。人を押しのけ……結局、外された。主役を……」

冬木 「違う！考えすぎだ」

夏実 「……もう、いいの。自信失くしちゃった……何をやってもうまく出来ない。芝居も……仕事も。実は……私ね、パートも怖くて……」

冬木 「怖い？」

夏実 「仕事ってさ、きちんとやって、しかも、速く、それでお金を貰うってことでしょ。そんなこと考えちゃうといつもビクビク、失敗したらどうしようって、動きが止まっちゃうの。怖いわ、仕事」

冬木 「でも、今、頑張ってるじゃない」

夏実 「時間、短いから、何とか勤まるの」

冬木 「そうなんだ……そうか！芝居って思えばラクになるんじゃない」

夏実 「（首を振り）芝居じゃないの、現実な

のよ」
冬木 「現実ね……（改まり）夏実さん！」
夏実 「えっ！」
冬木 「現実は……実は、私、異星人なんです」
夏実 「ええ！どうしたの？」
冬木 「だから、私は異星人です」
夏実 「異性人？異なったSEXの性の人……男と女、アベコベ、ヒックリ返って、実は女で男じゃない、異性人……まさか、あなたは」
冬木 「ううん、そうじゃないんですよ。私は、能力がなくて地球に捨てられたんです」
夏実 「地球に、捨てられた？」
冬木 「そう、遥か彼方からやって来た宇宙人の異星人です」
夏実 「あっ、そう！」
冬木 「あ、そう？」
夏実 「じゃ、宇宙人って言ってよ」
冬木 「えっ？……異星人がいいの！」
夏実 「何、バカなこと言ってんのよ。藪から棒に。おかしくなったんじゃない！」
冬木 「いいえ（拒絶）」
夏実 「（阿呆らしく見回し）でもさ、人間の形してるんじゃない」
冬木 「そうしてるんです」
夏実 「バカバカしい。勝手にしてよ」
冬木 「あのう、気になんないの……」
夏実 「何が？」
冬木 「私が異星人ってことが？」
夏実 「なんない」
冬木 「なんない！」
夏実 「で、何かあるの。あるんだったら、お好きにどうぞ」
冬木 「あの……物が動く、テレビとか机が、そう、手を使わず動かす能力。それとか心を読むとか、未来を見る。テレパシー、透視力、いわゆるその超能力が全くない。能力０の異星人なんですよ、私は！」
夏実 「何！その得意満面なのは」
冬木 「だから、その……地球に捨てられた。そこで生きろと」

夏実 「あのさー、何、言ってんの、それ。いよいよ、ホントにバカになってきちゃったんじゃない。だからさぁ、地球人じゃん」
冬木 「で、私は人並みになろうと、正規社員の仕事を求めた。安定した収入と生活、トントントーンと行くかと思ったら、僕に会ってさえくれない、書類審査で一巻の終わり、パーさ。歳取りゃ門前払。参ったね。パート、アルバイト、非正規か派遣社員の口ばかり。全くうまくいかない。不安だらけ。これといった能力もない私だけどさ、いたって普通の人間、いや、異星人さ。もちろん、地球人がするように結婚して子供を授かってさ、家族を夢見たりもするさ。でもさ、私は異星人。当然、ムリムリもちムリよ……、そんな時、芝居と出会った。一時だけど、別人に変身できる。いい体験だ。貧乏人にも金持ちにも、役柄でアッというま。殺人者、医者、政治家、そして、女性に老人、屍体にも……これはいい、芝居が仕事に出来たら。と、考えた……が、ムリムリムリ、やっぱりヘタだ、出来ない。ムリだった……私は能力０（ゼロ）の異星人なんだ」
夏実 「ねぇ、ねぇ、西さん、もう、判ったわ。私は大丈夫、もう、いいの。もう、いいわ、ね……ムリしないで」
冬木 「夏実さん！　あなたはとても上手です」
夏実 「いいの、西さん。もう、いいの」
冬木 「ホントに上手ですよ」
夏実 「西さん、ありがとう」
慌てて下手へ出て行く。
追う冬木。
暗転。

◯ホールから玄関ロビー
ホール上手奥から来る夏実、
玄関ロビーへ向かう。
追う冬木。
冬木 「夏実さん、待って！夏実さん、ちゃん

と生きようよ。芝居もいいけど、芝居より
ちゃんと生きようよ」
　夏実、立ち止まる。
冬木 「夏実さん……」
　振り返る、夏実。
　目に一杯の涙を溜め、震えている。
冬木 「……現実より芝居の方が楽しいなんて、
そんなの、そんなのホントは嫌でしょ。現
実も楽しくなきゃ。その方がいいでしょう」
夏実 「だって、あなただって……」
冬木 「だから、僕はそうしたいんです」
夏実 「……」
冬木 「ナツミさん！『芝居より楽しく生きよ
うよ！』……って云う芝居。異星人と恋に
落ちるラブコメ。コレしない？」
夏実 「はァ～？！（拍子抜け）」
冬木 「いい感じでしょ？」
　夏実、冬木に近寄り、眺め回す。
冬木 「どうしたの？」
夏実 「……（思案している）」
冬木 「大丈夫かい？」
夏実 「やっぱり、おかしいわ」
冬木 「はぁー？」
夏実 「あなたこそ、どこか悪いんじゃない」
冬木 「（ポカン）」
夏実 「大丈夫？」
冬木 「（頷き）ええ」
夏実 「（興味を抱いてやる）で、その芝居、
誰が、何を、どうするの？」
冬木 「二人でやる」
夏実 「二人？」
冬木 「そう、僕たち二人だけの二人芝居。
住む世界が違う異星人と地球人が、“人並
みに生きよう”って互いに自分を変えてい
くストーリー」
夏実 「異星人と人並みに、ラブコメ？なん
だか……」
冬木 「君と僕とで。ピッタリじゃないです
か。そうそう、この際、実践しましょう。
それをベースに芝居を作る。なーんちゃっ

て。いいじゃないですか」
夏実 「実践？バカ言って！」
冬木 「……そうだね、やっぱ……でもさ、安西さんとなら人並みの生活が出来そう……なんだけどさ……これで、みじめったらしい生活とオサラバだって、やっぱ、いいですよ」
夏実 「エッ！ムリムリムリ！それってどういうこと！何考えてんの！それにさ、あなた、異星人って言わなかった？到底、無理でしょ！」
冬木 「二人で夫婦生活をする。でも、もちろん芝居さ！マネ、ゴッコさ。いいんじゃない」
夏実 「ゴッコ？」
冬木 「でも、真剣にやる」
夏実 「でも、ゴッコでしょ！」
冬木 「”人並みに生きようよって頑張る”それがテーマなんだからさ、真剣になっちゃうでしょ」
夏実 「ゴッコじゃないじゃないの、それって」
冬木 「いいや、芝居さ！体を張った正真正銘の芝居さ。体験も研究も取材も何もかも、活かせながら芝居ができるんだ。しかも、二人だったら経費削減、興行費も捻出できちゃうじゃない。これもとっても大事なことなんだ。でしょ。安西さん！打ってつけじゃないですか」
夏実 「……（呟く）何もかも、活かして、芝居ができる」
冬木 「芝居をするために真剣に生きるって”芝居よりちゃんと生きろ”ってことなんですよ」
夏実 「真剣って！夫婦って？アレも？」
冬木 「あ、え、もちよ」
夏実 「フーン……そういう事」
冬木 「な、何て云うか。夫婦なら……」
夏実 「異星人なんだよねぇ、西さんは」
冬木 「ええ！そのー、でも、アレは、一緒じゃないかなぁ」

夏実 「そんなの有り得ない！」
冬木 「だといいけど……分かんないじゃな
　い、やってみないと」
夏実 「分かんないか……やってみないと…
　…同棲生活か……憧れたな」
冬木 「でしょー！」
夏実 「ウウウーン、ダメダメ！一線超えたら
　ゼッタイダメ！」
冬木 「！？えっ！て、云うことは」
夏実 「……フフフッ、おもしろいかも」
冬木 「！そう、そうだよ、面白いよ」
夏実 「でも、超えたらダメだからね」
冬木 「でもさ、暮らしだしたらツイ」
夏実 「張り倒す！」
冬木 「そんな……タマには……」
夏実 「（無視）」
冬木 「ウソ、ウソ、僕、異星人だもん。ムリ、
　ムリ」
夏実 「そうだよねー、私たちはもう大人。青
　い青春なんか、とっくに過ぎ去ったんだか
　ら。何やっても平気じゃない」
冬木 「（頷き）そうだよ、そうだよ。じゃ、
　まずさ、しっかりした生活しなきゃ。正社
　員はムリとしてもフルタイムの仕事、就か
　なきゃね」
夏実 「はー？……（気が引ける）」
冬木 「（察知し）大丈夫？夏実さん」
夏実 「頑張ってみる」
冬木 「二人芝居の二人の旗揚げ公演、頑張る
　ぞー、稼ぐぞー」
　　暗転。

◯ドラッグ・マルマルストア・在庫室
　　夏実が商品を探している。
夏実 「ブリーチ…ブリーチっと…どこだっけ」
　　中年おばちゃん、よし子（フルタイム勤
　務、４５）が、やって来る。
よし子「あら？まだ、居るの？」
夏実 「え、ええ……あのう、すみません。月
　星ブリーチはどこでしたっけ」

よし子「後ろ」
夏実 「あっ！」
よし子「あなたの後ろ、一番下」
夏実 「ありがとうございます」
よし子「まだ、覚えてないの」
夏実 「え、ま、すみません」
よし子「（溜息）頼んますよ。で、なんで、
　いるの……残業？」
夏実 「ええ……」
よし子「まぁ、珍し！！」
夏実 「あのー、すみません。今日から、フ
　ルタイムなんです」
よし子「ええっ！そうなの！アハーン、あの
　バカ店長、なーんも言ってくれないもんだ
　から、ったく。そうなんだ。私らと一緒ね」
夏実 「はい」
よし子「そーぉ、大丈夫？」
夏実 「だい……じょうぶです」
よし子「で、社員さん、狙ってたりして！」
夏実 「……はい、頑張ります」
よし子「おおお、そう、フルタイムだけでも、
　ラッキーってなことなんだけどさ……結構、
　隅に置けないね、フーン」
夏実 「いえ、そんな……」
よし子「ホント、頑張らないと！覚えるもの
　は、キッチリ、覚えて。責任感も強く持っ
　て、云われる前に何でもやる。失敗はしな
　い。ホントに大丈夫？」
夏実 「！？ま」
よし子「いろいろ大変になるわね、夏実さん！」
夏実 「そう……ですね」
よし子「で、アンタ、芝居は？」
夏実 「休みます。暫くは」
よし子「（大きく頷き）いい、それでいい。道
　楽止めて、生きる為には仕事よ。いい、いい
　わ。みんな、それで頑張ってるんだから」
夏実 「ええ……」
よし子「実はね、あたし、アンタのこと、人生
　舐めてんじゃないかって、少し、心配してた
　の。でもさ、これで安心。あとは地道に進む

こと、コツコツと。レールにやっと乗ったね。
良かった、良かった」
　　そこへ、同僚の中年女性、みどり（フルタイム勤務・４８）が来て、
みどり「夏実さーん。店長、まだかって」
夏実 「はい、今、行きます」
　　と、ブリーチ抱えて行く。
みどり「（呼び止め）夏実さん、残業できる？今日！」
夏実 「！？」
みどり「替わってくんない」
夏実 「……」
よし子「しな！しといた方がいいよ！何かと」
夏実 「え、まぁ、今日は……」
よし子「しろって云う事なのよ」
夏実 「…はい……します」
みどり「じゃ、お願いね」
　　夏実、出て行く。
よし子「フルタイムだって、ビックリしちゃった」
みどり「落合さんの代わりよ」
よし子「探してたんじゃないの？」
みどり「それがさ、繁忙期だからって、特別だって！」
よし子「フーン、ついてるわね。でも、云いたかないけど、あの子、よく失敗するわよ」
みどり「フルタイム。必死になりゃ、できる様になるんじゃない」
よし子「さっき話したけど。どうだか？」
みどり「ダメなりゃチョン！良けりゃOK。やってみなきゃ」
よし子「……そうね。でもさ、慌てなくても、もっといい人来るまでさ…あっ！店長、狙ってるとか、そんなのない。独身だしさ、顔もさボディもさ、それなりに……」
みどり「あの子から云ってきたんだって」
よし子「そう、本気なんだ」
　　暗転。

◯凸凹物流センター・倉庫

下手から上手へ、
パレットに積まれた商品、
数アイテムが並んでいる。
その前で、白髪混じりの中年男が、
冬木の身体を品定めしている。
横には運搬専用カーゴ車が１台。
男　「西さんだっけ、いくつ？」
冬木「４２です」
男、カーゴ車を揺り動かし、
男　「これ、ピッキング、やった事ある？」
冬木「いいえ、でも、商品の配達はあります」
男　「あ、そう。私、係長代理の永峰（５７）です。この道一筋、５７です。ハハハハハ……（と更に舐め回す）」
冬木「！？……」
永峰「頑張ればいけるか。最初が肝心だな」
冬木「ハイ！」
永峰「あんた次第だ」
冬木「ハイ！」
永峰「重いよ。ビール、酒、油、水」
冬木「ハイ！」
永峰「たまーに、軽すぎるトイレットペーパー」
冬木「ハイ！」
永峰「こいつは嵩張る」
冬木「ハイ！」
永峰「あんた、イキがいいね」
冬木「ハイ！どういたしまして」
永峰「貧弱なワリには中々、声だけはイイね、ハイがさ」
冬木「ハイ！よろしくお願いします」
永峰「ハイ！……ウツっちゃったなー（改まり、カーゴ車を掴み）これに商品を積んで、次から次へと、積んで、積んで、積んで、そして、次へ、次へ、次へと進む。見てみなよ」
下手後方から、指示書を見ながら、
各種商品を、カーゴ車に要領よく載せ、
テキパキと次の物品、またその次、
その次と進む従業員（たち）。

次から次へと迅速、正確、丁寧に
商品を捌いていく。
見ている冬木。
永峰 「積み方もな、コツだ。指示書でイメージして、ハハーンってワケだ。ま、そのうち、ホホイのホイさ。場数さ」
冬木 「ハイ！」
永峰 「終わったら専用エレベーターのとこへ、持って行き、カーゴ車のまんま、下へ降ろして、そのまんま、トラック積んで、出てっくワケさ。で、アンタはさ、エレベーターとこまで持って行き、で、戻って、空のカーゴ車取って、また、次へ、次へ、次へ進んで、持って行く。また、戻って、次へ、次へ、次へ進んで、また、次へ、次へ、時間が来るまで次へ、次へと。お願いします」
冬木 「ハイ！時間が来るまで？」
永峰 「１２時間。休憩１５分、食事４５分、また休憩３０分。さらに、追加残業あれば、それに見合った休憩があります。勿論、残業手当、深夜手当もキチンとあります」
冬木 「ハイ！」
永峰 「（ジロリ）昼はイイけどさ。夜、夜勤が辛い。皆んなさ、金のために頑張るんだって、そう云うんだけどさ、やっぱ、ダメね。体調崩して辞めてくモン、結構いるね。若いヤツは、そうねー、多少はイイんだけどさ。やっぱ、続かねえな。アンタもさ、無理しなくてイイよ。社員の道もなくはないんだけどさ。身体潰したらさ、大変だよ。フルじゃない方がイイんじゃない。短いのんもあるからさ、よかったらさ、考え直したら。考えとくよ。こっちもさ」
冬木 「ハイ！私は社員目指して頑張ります」
永峰 「ほー、そう、そうかい。でもさ、週、昼２回、夜、３回ってだけなのに、ダメな人にはダメなんだな、こりゃ。気持ちは判るが、身体が拒否するんだろうね」
冬木 「ハイ！」
永峰 「（ジロリ）ゴメンね。一応、云っといた

方がいいと思ってね」
冬木 「ハイ！」
永峰 「でもさ、お陰様で、俺には、合っている
みたいなんだな」
冬木 「ハイ？……」
永峰 「西くんだっけ。まっ！頑張ってみてよ。
お金にはなるからさ」
冬木 「ハイ！やります」
永峰 「ハイ！おお、いい返事じゃない」
冬木 「ハーッ、ハイ！」
永峰 「ハイ！か……（ポツリ）ここまでしな
きゃ、普通に生きていけないのかねぇ。え
らい世の中になってきちゃったなー」
冬木 「！？」
永峰 「本部からサ、飛ばされて、ズーッとコレ
さ、でも、やっぱさ、お天道さんと一緒に働
きたいよな。ズーッとさ」
暗転。

◯冬木宅・ダイニングキッチン（夜）
間接照明が空間を柔らかくしている。
円形のダイニングテーブルには、
ワイン、パスタ、チキン、バケットが
並ぶ、ささやかなディナー。
中央の淡い蝋燭の光が揺れている。
冬木、椅子を引き、
冬木 「どうぞ、安西さん」
夏実 「ありがとう、西さん」
冬木 「とんでもない、こっちこそ、うれしい
な、安西さん」
夏実 「いい部屋ね、西さん(改まり)これから、
お世話になります」
冬木 「いやいや、自由に使って下さい。安西
さん」
グラスにワインを注ぐ冬木。
見つめる夏実。
冬木 「どうぞ、安西さん」
夏実 「ありがとう、西さん」
冬木 「(改まり)安西さん！」
夏実 「！？何、西さん」

冬木 「安西さん……」
夏実 「あの、その、安西さんって云うの」
冬木 「ああ……西さんって云うの」
夏実 「よさない」
冬木 「じゃ、夏実さん」
夏実 「冬木さん」
冬木 「お前」
夏実 「あんた……（照れて）フフフ」
冬木 「フフフ、ハハハ」
２人 「フフギャハハハッハァ」
冬木 「ハハハ……（真顔に戻り）夫婦生活の
門出に」
夏実 「違うでしょ」
冬木 「人並みの生活を目指して」
夏実 「男と女、２人で実地体験」
冬木 「その研究、取材の成果を」
夏実 「芝居に活かそう！」
２人 「興行費も積み立てよう！カンパーイ！」
グビグビ、グビグビ……、
一気に飲み干す２人、顔を見合わせ、
夏実 「あちゃー！」
冬木 「やるね！」
続いて、パスタに手をつけ、
夏実 「（クルクル巻き）おいしそー」
冬木 「（口に運び）いただまーす」
夏実 「（声色）ねぇ、アナタ」
冬木 「！（合わせて）何だね、夏実」
夏実 「ねぇーねぇー、ねぇー。何で、私なの」
冬木 「！何で……（見つめる）」
夏実 「（逸らす）バーカ、冗談よ、芝居」
冬木 「（詰め寄り）僕は、芝居じゃない」
と顔を寄せる。
夏実 「……」
夏実も目を閉じ受け入れようとする。
唇と唇が重なる瞬間、
夏実の手が結合を防ぐ。
冬木 「！！？？」
夏実 「早過ぎる。あなたのこと、まだ、ゼン
ゼーン知らないんだから」
冬木 「そう、そうだよな。そら、そうだ。

じゃ、飲もう」
　　冬木、夏実、ディナーを楽しむ。
夏実 「ハハハハ（涙を浮かべ）忘れてたわ」
冬木 「どうかした」
夏実 「お喋りして、飲んで、食べて、笑って
（目頭を抑え）泣いてさ……」
　　ワインを注ぐ、冬木。
夏実 「ありがとう、冬木さん」
冬木 「イヤー、いいよ、そんな、礼なんて。
これから、いつも、毎日、コレさ！」
夏実 「毎日！」
　　電気がパッと落ちる。
　　ろうそくの灯りもスーッと消えていく。
　　真っ暗。
夏実(声)「停電！」
冬木(声)「どうかな？」
　　ピポパピポと(例の)未来音が響いてくる。
　　室内、ボヤーとした光に包まれる。
　　夏実は目を閉じて、
　　突っ立ったまま動かないー、
　　時間が止まった様な感じだ。
　　冬木、徐に天を仰ぎ見る。
　　天なる声が降ってくる。
　　『ウインターツリー、１８０日後に帰還。
　　帰還。最終能力を与える。与える。最後
　　の能力だ。最後の能力だ』
　　ピポパピポがけたたましく響き、
　　消えていく。
　　と、同時に灯りも、元に戻る。
　　夏実、覚醒し、
夏実 「！？な、何だっけ。今、私、何、云っ
てたんだっけ」
冬木 「楽しいって」
夏実 「あっ、そうか。変なの？」
冬木 「毎日」
夏実 「そう、毎日ね……楽しむの」
冬木 「で、仕事はどう？」
夏実 「ま。まぁーね……そっちは？」
冬木 「それがさ、僕のこと不安がってジーッ
と見てんのよ」

夏実 「なんで？」
冬木 「ほら、この通り（体を見回し）立派じゃないからね。いい歳だしさ」
夏実 「大丈夫？」
冬木 「ダイジョウブ、ＯＫさ」
夏実 「何で、判るの？」
冬木 「そういう気がするからサ」
夏実 「そういう気……」
冬木 「そう」
夏実 「（呆れる）アーア、そんなの……」
冬木 「そっちは？」
夏実 「エッ！まぁ、こっちは、こっちで…」
冬木 「どうしたの」
夏実 「……ちょっとね」
冬木 「（覗き込む）」
夏実 「やっぱりさ……」
　　冬木、ワインを注ぎ 、差し出す。
夏実 「ありがとう……自信、持てなくてさ」
冬木 「持てなくて？」
夏実 「そう、怖いの……間違い犯したらどうしよう、失敗したらどうしようって、いつも、気になっちゃって、緊張しっぱなしで、頭がグチャグチャなの」
冬木 「そうなんだ」
夏実 「フルタイムなんて、重くって、辛い……社員なんて、とっても……」
冬木 「夏美さん、そんなに深刻にならないで。芝居のためって思えばさ、少しは気が楽になるんじゃないかな」
夏実 「でも……怖いの」
冬木 「あのう、もう少し頑張ってみようよ。そのうちさ……そう、コツを覚えてさ、そうだよ場数さ」
夏実 「ホント、私って、我儘なんだから」
　　冬木、抱きしめる。
　　寄り添う夏実。
　　激痛が走り、
　　知られないように顔を歪める冬木。
　　我慢できず、屈み込む冬木。
夏実 「！？」

冬木 「ごめん、足が攣ったんだ。情けない、
　こんな時に」
夏実 「ホント（笑む）」
冬木 「（顔を歪めながら）だよね……」
　　暗転。

◯ドラッグ・マルマルストア・在庫室
　　小物から大物まで山積みの商品。
　　上手で複雑多種の検品を夏実、
　　下手で単純な検品を学生バイトの
　　サーヤ(１９)が行っている。
　　所狭しと
　　伝票と端末を手に悪戦苦闘の夏実。
夏実 「１、２、３、４、あれ？……もとい、
　１、２、３、４、５、あっ！これじゃない。
　違うわ！」
　　伝票を繰り直し、
　　目当てのモノを見つけ、仕切り直す。
夏実 「１、２、３、４、５、６……」
　　鬼気迫っていく夏実の形相。
　　そこへ、飛び込んでくるサーヤ。
サーヤ「できました～！」
夏実 「ギャェ！アッ……ア、アハハハ、も
　う……驚かせないで」
　　真っ白の夏実。
サーヤ「すみません……あのう、できました」
夏実 「そう……じゃ、次、これ、お願い（伝
　票を渡す）」
サーヤ「ハーイ（去る）」
夏実 「（戻る）えーと……そうそう、１２３
　４５６７８９で次は、そうそうこれか、１
　２３４５（伝票捲り）アレ！？、これじゃ
　ないわ（また、捲る）これだ！フー、１２
　３４５６……」
　　作業を止め、夏実を気にするサーヤ。
夏実 「あ、そうそう、うーん、これかな、こ
　れとこれと、エーー、１２３……あ、あっ
　た！フー」
サーヤ「（来て、穏やかに）安西さん。すみ
　ません、あのう、声がさ、出てて、喋って

るんですけど……ちょっと、気になっちゃって……すみません」
夏実 「へっ！そう、そうなの。喋ってる？声が……アレー、ゴメン、ゴメン」
一礼して、素早く戻るサーヤ。
社内電話が鳴る。
出る、夏実
夏美「はい、在庫室です。はい、安西です……今、しております。もう、直ぐかと、はい、遅くなる？……はい……失礼します」
いそいそと作業に戻り、
夏実 「（溜息）ハー、えーと、次は、次はどれだっけ(と声出しに気付き、サーヤを伺う)」
次から次へと作業しているサーヤ。
夏実 「１、２、３、４……アレ、あ、そうそう（口だけモグモグ）……」
サーヤ「（来て）できました」
夏実 「（眼中にない）アレッ！ない！おかしい！ナイナイナイ……！」
サーヤ「！」
夏実 「（探している）アレー、ナイのよ、そんな、そんなはずないよ……返品、返品、無い、ウエー、アー……アー」
サーヤ「あのう」
夏実 「（気付き）あらー？」
サーヤ「持ってるんじゃないですか？」
夏実、伝票のバインダーの下に
重ねて持っていた赤色の返品伝票。
夏実 「あっ！有るじゃない。アー…ありがとう。情けない、もうダメね。アハハハ。で？」
サーヤ「あの……」
夏実 「何？」
サーヤ「できました」
夏実 「！そう、早いね。バッチリ？」
サーヤ「ええ」
伝票を受け取り、
夏実 「ありがとう。ご苦労様。もういいわ」
サーヤ「お疲れ様です」
サーヤ、行くが、振り返る。
独り言を連発しながら戸惑っている夏実。

サーヤ　　「……」
　　戻って、
サーヤ「もう少し、手伝います」
夏実 「他にすることあるんじゃないの」
サーヤ「無いんです。３０分ぐらいは」
夏実 「じゃ、こっちの分、お願い、助かるわ」
サーヤ「はい！」
夏実 「サーヤちゃん。ありがとう」
サーヤ「いえいえ、そんな」
　　再開。
　　どんどん消化していくサーヤ。
　　戸惑っている夏実、
　　スピーディにチェックしていくサーヤ、
　　に目が捉われ、
夏実 「……（溜息）」
　　しゃがみ込む夏実。
　　×　　×
　　そこへ、
　　いきなり中年男（５０）が入ってくる。
男　「ボスは、どこだ！」
　　と、掴んでいた学生バイト、
　　猛（２０）を引っ張り、突き放す。
　　夏実、サーヤは何事かと呆然。
猛　「イネェーッて云ってんだろ、このバカ！」
　　夏実、慌てて、
夏実 「ああ、何いってんの？……田中くん！謝りなさい！」
　　夏実、男に向き直り、
夏美 「誠に、失礼いたしました。すみませんでした」
　　突っ立ったままの
　　猛の頭を下げさそうとし乍ら、
夏実 「早く、謝りなさい」
　　抵抗する猛、下げない。
夏実 「早く、謝るの！」
　　頑なに拒む猛。
夏実 「もう(手に負えず、自らもう一度、男に)ホントにすみません。失礼なことを致しまして、猛くん！謝りなさい」

拒んでいる猛。
男　「ってな具合だ。腹立たしくてたまらん。ボスはどこだ！」
夏実「ボ、ボス？」
男　「上のモン。店長か何かだよ！」
夏実「あいすみません。只今、社の会議でして、不在なんですが」
男　「（笑んで）フフーン、で、アンタは？」
夏実「いち、一応……いえフルタイムのパートです」
男　「いちおー、フルタイム……？まぁ、いい。きちんと謝ってくれた、アンタでいい」
夏実「？…どのようなことでしょうか。私では対応致し兼ねることがあるかと思いますが、その点もご了承して頂けるなら……」
男　「（制し）判った、もういい」
手にしていた６缶パックの発泡酒を掲げ、
男　「これ、貰ってくよ。迷惑料としてな」
夏実「あ、あの～……」
男　「いえ、慰謝料とまでは云わない、迷惑料でいい」
サーヤ「……」
猛　「（俯いている）」
夏実「あ、あ、そのー」
男　「理由はこうだ。君（サーヤを手招きし）ちょっと、手伝ってくれ！」
サーヤ「（後退さる）」
夏実「いえ、いえ、私が」
男、夏実の胸元、お尻をしげしげ眺め、
男　「そう。まぁいいや。アンタも魅力的だ」
夏実「（戸惑う）」
男　「じゃ、商品補充してるフリしてくんない。いつものヤツだよ」
一間。
【猛とのイザコザを再現】
商品棚に商品を補充している(フリをしている)夏実、傍には商品の載ったトレー、それを間に後ろに立つ男。
男　「で、俺はアンタの前にある商品を見たくて云ったの。『ごめん、そこ、見せて』と」

夏実、男を見る。
男　「どうする？」
夏実「！……（立ちながら）はい、すみません。少々、お待ち下さい。どうぞ」
と、その場を空けて、男を招き入れる。
男　「アンタ、いいオッパイしてんな」
夏実「あ、いえ、いえ……今は、そういうことじゃ」
男　「そうだよな……そうやって、除けるだろ。できるじゃない、アンタは。なのに、アイツは！（と猛を指す）」
猛　「（睨んでる）」
男　「チェッて舌打ち、しかもさ、横柄に『ちょっと待ってよ』なんてさ、仕事、続けてやんの。フツー、止めるだろうが」
夏実「はい、すみませんでした」
男　「おかしいだろ、こんなの。な！生きてて５０年、こんなのなかったよ、初めてだ……客より店員が偉かったのって。落ちたもんだね、ちゃんと教育しなきゃ」
夏実「誠にすみませんでした」
と平謝り。サーヤも。
が、猛はサラサラ謝る気なく、
不貞腐れている。
男　「お前！俺だって何度もそんな目にあってんだよ。でも、仕方ないんだよ。そういう商売してんだろ。特にさ、ノッてる時なんかはさ、パッパ、サッサ、パッパ、サッサ、リズムにノッてるんだもんな。途中でチャチャ入れられたらたまんないよな。判ってんのかよ、貴様！！」
ビクつく猛。
サーヤ「！」
夏実「！」
男　「そこでだ、俺も大人だ。カーッと頭に上ったイライラ抑えて、できる限り穏やかに、もう一度『そこを見たいんだが』って云ったワケよ……ならどうだ、無視してトレー押してさっさと行きやがった。後ろ姿が云ってんのよ。ウルセーナ、クソオヤジ、

オレのジャマすんな！ってな！ふざけんじゃねぇ！ガキに舐められてたまるかよ！」
夏実 「どうも、ホントにホント、どうもすみませんでした」
　サーヤも平謝り。
　が、猛は知らん顔。
　男、ポケットにねじ込んであった、
　買い物袋を引っ張り出し、夏実に見せる。
男　「それから、これ、アイツのトレーに引っ掛かって、このザマ」
　買い物袋が破れている。
男　「コレしかねえんだよな。参っちゃたよ」
猛　「えっ？」
夏実 「どうも、すみません。猛くん！」
　突然、猛が叫ぶ。
猛　「ウソ、ウソだ！そんなの持ってなかった！ウソつくな！」
夏実 「黙って！」
猛　「知らない、そんなの」
男　「何だと！」
夏実 「静かになさい！猛くん」
猛　「チェッ！勝手にしろ」
　夏実、男と顔を合わす。
男　「チェッ！か……アーア、まったく、嫌な気分にさせてくれるね。謝るどころか逆上してやがんの、コイツ！アンタなら判るよね。ね、アンタ！」
　夏実、頭を抱え込んでいる。
男　「どうしてくれる？」
夏実 「あの、その、困ります……」
男　「はー！どうしてくれるんだよ？」
夏実 「ハーハー……（息苦しそう）」
サーヤ「（見て）安西さん、大丈夫ですか」
夏実 「（深呼吸して、落ち着いて）わかりました。そのお品で良けりゃ、どうぞ、お持帰り下さい。もう２パック差し上げます。そのー、買い物袋の事もありますし……」
サーヤ「安西さん！」
夏実 「いいの。サーヤちゃん、取って来て」
サーヤ「はい」

男　「いやいや、今日は、これでいい。今度、
　来る時の楽しみだ、取っといてくれ」
　　夏実とサーヤ、見合わす。
夏実「いいえ、まとめてお持ち帰りください。
　サーヤちゃん、お願い」
男　「いい、楽しみを取り上げるな！また、
　来る。その時な」
夏実・サーヤ「（引き攣る）」
猛　「（ビクつく）」
男　「すまん、怖がらせてしまったな。今日
　のところは６缶で６００円か、安いもんだ。
　不幸中の幸いちゅうとこかな」
　　知らん顔の猛。
　　夏実、猛の頭を掴み押さえる。
　　抵抗せず、なされるままの猛。
夏実「どうも、すみませんでした」
サーヤ「すみませんでした」
男　「アンタ、ご苦労さん、もういいわ。大
　変なヤツ雇っちゃったな。店長に云っとけ
　や。キチンと社員教育しなきゃダメだって！」
　　と、出て行く。
夏実「猛くん！なんて態度」
猛　「（黙っている）」
夏実「ねぇ、悪いって思ってないの？」
猛　「……」
夏実「ねぇ！！」
猛　「（ポツリ）買い物袋、ウソだ」
夏実「うそ？」
猛　「（頷く）」
夏実「他のことは？」
猛　「ホント……」
夏実「そう……」
猛　「だけど、買い物袋はウソだ」
夏実「そう……でも、田中くん、ここの仕事、
　お客相手の商売だってこと判ってる」
猛　「……」
夏実「店長、帰ってきたら、キチンと本当の
　こと話して。いいわね、必ず。判った？」
猛　「……」
夏実「じゃ、続きやってきて」

猛　「辞めます（エプロンをポイと捨て）今度、給料、貰いに来ます」
　駆けて行く。
夏実「田中くん！」
　追い駆けようとするが、躓る。
夏実「……ハァー、ハァー」
サーヤ「安西さん！安西さん！」
　×　　×
　バタン！
　なんと、
　あの男が勢いよく飛び込んできて、
　よろけて倒れる。
　続いて、
　よし子、みどりが入ってくる。
みどり「あんたも」
　と猛を強引に引っ張り込む。
　見上げる夏実とサーヤ。
　みどり、男の前に立ちはだかっている。
みどり「そこ置きな！」
　男、６缶パックを出す。
よし子「騙されてたんや」
みどり「うちら、居らんのん見てたんや」
男　「知るか、くそババア」
みどり「アホ、あんたが知らんかってもウチらは、よーう知ってるんや」
よし子「ホント、ケチなヤツ、発泡酒６本でさぁー、人生、傷つくとわねぇー」
みどり「さてと、警察、電話するからね」
男　「何処へでも勝手にしな」
よし子「（猛に）アンタも辞めることあらへんわ」
猛　「……」
よし子「こいつの罠に嵌ったんやから。悪いのはコイツや」
みどり「でも、アンタ。あんたの態度はヤッパリ改めなアカんわ。それは、このおっさんの云う通りやわ」
よし子「辞めんのは、いつでも出来る。判った？」
猛　「……」

よし子「ったく、どうなの」
猛　「え……」
みどり「安西さん、警察、電話。ドロボーって！」
男　「フン」
　狼狽え出す猛。
　プッシュし、受話器を当てる夏実。
　瞬間、
猛　「ま、待って！電話を切れ！」
　思わず切る、夏実。
よし子「！」
みどり「！」
サーヤ「！」
　一同、猛を見る。
夏実「……（も見る）」
猛　「（俯いたまま）……お願い」
　男、猛を一瞥し、一同を見廻す。
猛　「……」
みどり「どうしたっていうの」
猛　「……オ・ヤ・ジなんだ」
夏実「……田中くん！」
よし子「アンタ……」
猛　「先月、1回見たんだよな…ヤッパリ、チキショー！コイツ、ここには、来るな、来るなって思ってたんだ。でも、今日来やがった。そして、オレを利用しやがった。コイツは盗人だ」
みどり「アンタもさ、コイツって？アンタの親でしょ。何でこうなるの(男に向き直り)アンタもアンタよ！何考えてんの。親子でさ……」
猛　「コイツはオレのオヤジなんかじゃない（泣き崩れる）」
　傍で震え出す夏実。
みどり「何なの、これは、なぜ……」
猛「何なのこれは、なぜ？簡単に云うなー！フツーに出来てりゃ、とっくにやってラー……オレさ、オレ、こんなオヤジが、オレ、オヤジを見るとさ、強張って、動けなく、なっちゃう……寒くなるしさ……」

男　「まだ、りゃー、たいしたもんだ」
みどり「効いてる？」
男　「そうだ。こいつに言い聞かせたんだよ。俺には歯向かうなよってさ。まぁ躾かな」
みどり「躾？」
男　「俺を怖がるのさ。どんな些細なことでも。ほら、震えてやんの」
　　猛、縮こまって、震えている。
男　「俺に服従しろってさ。こう言うのん、洗脳って言うんかい？」
みどり「洗脳！」
男　「３つか４つか、５つかな、効くねぇ」
猛　「ヤメロー、ヤメテくれー！」
よし子「（気付く）安西さん？」
　　夏実がブルブル小刻みに
　　激しく震えて泣いている。
サーヤ「（背中を摩る）安西さん、安西さん、大丈夫ですか……」
夏実「（覚醒した様に）ええ、ゴメン」
　　男、いきなり、猛の胸倉を掴んで、
男　「俺に恥を掻かせやがったな」
　　抵抗しようとするが、
　　出来ない猛、顔が歪む。
　　みどり、よし子、２人を懸命に
　　引き離す。
みどり「恥ってどっちがよ。アンタだよ、アンタ！」
　　隅っこに蹲っている猛。
猛　「（呟いている）だから、警察には電話しないでください」
　　男を取り押さえている、
　　みどりとよし子、
　　サーヤと夏実、
　　どうしていいのか判らない。
男　「ほら、電話しないでくれって……いい子じゃねえか、俺のこと思ってさ」
猛　「オレに、オヤジなんかは居ない。オヤジは居ない。オレにオヤジは居ない。電話しないで下さい。お願いです」

夏実が寄り添い、抱き寄せ包んでやる。
暗転。

◯ドラッグ・マルマルストア・控え室
帰り仕度のみどりとよし子、
一息入れてる夏実。
そこへ、店長来て、
店長 「やっぱり、辞めるって」
みどり「ブチ込まれてんやから、大丈夫やん」
店長 「いずれ現われるって……」
よし子「イヤだね」
店長 「離婚して、見つからんように、暮らしてたんやって。母と二人で」
夏実 「（呟く）一人っ子……」
店長 「ったく。居るんやなぁ、ああいう奴」
みどり「ん、もーう。たまらんわー」
よし子「イヤだ、イヤだ。ホント、イライラするわ」
サーヤ、バッグを抱えながら来て、
サーヤ「お疲れ様ですぅ」
一同 「お疲れさん」
店長 「ねぇ、ねぇ、ちょっと、サーヤちゃん。誰か居てへんか、バイトしたい子」
サーヤ「はぁ？」
店長 「誰か居るやろ！サーヤちゃんやったらええ子居るんちゃう。居ったら、教えてや。頼むで！」
サーヤ「ええ、はい、一応。それじゃ、お先に失礼します」
みどり、よし子も、
「うちらも、失礼するかね（と、夏実に）アンタ、ちょっとは落ち着いた？」
夏実 「ええ。ありがとうございます」
よし子「結構、繊細なんやね。アンタ」
夏実 「……（頷く）」
みどり「ほなね、店長！」
手を振り出て行く。
店長 「明日も頼んますよ！」
夏実、席を立つ。
店長 「で、安西さん、もうすぐ終わるんやろ」

夏実 「あのー、それが、１時間ほど掛かるか
と……」
店長の顔が険しくなっていく。
店長 「あぁ、そう……１時間か(腕時計を睨み)
もうちょっと、テキパキ、段取よくしてくれ
へんと。それは、ちょっと遅すぎやわ。安西
くん、君、前からやってたんやから」
夏実 「はい、すみません。頑張ります」
店長、伝票を出し、
店長 「それと……この油、１ケースと、洗剤、
１ケース多く注文してるんやわ。返品、効か
んかったら……もう、しゃあないんやけど。
よう注意してや。今度、また、あったら、買
うてもらうからな」
夏実 「はい、すみません」
店長 「と、これ（リップクリームを掲げ）」
夏実 「？」
店長 「１箱、見当たらんねんけど。探しとい
て」
夏実 「はい、すみません」
と、深々、頭を下げる。
店長、行く。
暗転。

○　同　・倉庫
来て慌てて、探し始める、
夏実 「あれー、あれー、アレッ！確か、ここ
に有ったハズなのに……」
必死に探す。
夏実 「ない、ない、ない、ナイ！」
へたり込む夏実。
一間。
気力を取り戻した夏実、
伝票と端末を手に、
夏実 「あと２ケース……」
バーコードにピッピッと翳していく。
店長来て、
店長「（腕時計を見て）８時半か、残業つか
んで３０分！判ってるやろな」
夏実 「ええ」

店長 「フー、堪忍してえなぁ、もう遅いから
　ええわ。明日、朝、来てからで、ええから」
夏実 「すみません。わかりました。すみませ
ん」
店長 「ホント、もう、ええから」
夏実 「あのー、さっきのリップクリームなん
　ですが」
店長 「あっ、アレ」
夏実 「はい。それなんですが、確か、ここに
　あったハズなんですが……」
店長 「おお、そうやな。それそれ、ゴメン、
　ゴメン、よし子さんがやな、B店へ送った
　って云ってたんやわ。ゴメンなー、そう云
　っとったんや、ほら、あんな事あった後や
　さかいな、堪忍な」
夏実 「はぁ……」
店長 「ほな、早よ帰りや」
　　行く。
　　が、立ち止まり、
店長 「あの〜、安西さん。前から思てたん
　やけど、君、ええプロポーションしてる
　やん。何かやってたん？」
夏実 「……ええ、芝居だけですけど」
店長 「ああ、芝居ね。ウマイんやろな。イ
　ロんなことが……」
夏実 「はぁ？……」
店長 「ほな」
　　行く。
店長 「（呟く）ええカタチしとるわー」
　　一人、残された夏実
　　暗転。

○凸凹物流センター・仕分けエリア（深夜）
　　テキパキと商品を載せ、
　　カーゴ車をガラガラ、
　　再び、荷を載せ、
　　キビキビと廻っている冬木。
　　弱々しかった身体が逞しく見える。
　　ガラガラガラ、ガラガラガラ……。
　　作業中、永峰課長代理がやって来る。

永峰「どう？」
冬木 「ハイ！順調です」
　　傍に廻ってきた同僚が
　　荷積みに迷っている。
　　それに、気付き、
冬木 「すみません、ちょっと、待って下さい」
　　積み方のアドバイスをする。
　　永峰も歩み寄り様子を伺う。
永峰 「（何度も頷く）」
　　頭を掻き乍ら、
冬木 「すみません。何かご用でしょうか」
永峰 「いいね、いい。あのー、先ずはさ、パートなんだけどさ、パートリーダー、やってみないか？」
冬木 「ハァー、パートリーダー？」
永峰 「パート、アルバイト、非正規、派遣のまとめ係り、作業、スケジュール管理、その他モロモロ。円滑に作業を処理し、気持ち良く作業ができるように進める。少々、荷が重くなるが、やり甲斐もあるんじゃないかな君なら、大丈夫だ」
冬木 「ハー、ハイ！（嬉しそうに）パートリーダー……」
永峰 「でさ、研修期間、あと何日かな？」
冬木 「ハイ！４日で“半月研修”終わりです」
永峰 「そうか……規約があるからな、うーん、１ヶ月先に頼むとしようか」
冬木 「ハイ！でも、この私が、何故？」
永峰 「カンだよ」
冬木 「カン？」
永峰 「君は宙に浮いてるような軽やかさがある。抜けてるような気もするが、それがイイ。……多分廻りを和やかにする。そう云う気がするんだな」
冬木 「……」
永峰 「私も長年やってて、見りゃ判るってことだよ！どうだ？」
冬木 「えー、ハイ！判りました。お願いします」

永峰 「皆んなより、３０分早く出て、タイムスケジュールの確認、ミーティング、従業員の点呼、明日の段取りなどと仕事は増える。が、その分、金になる。時給１００円アップと半年は１万円、順調なら２万円＋αの手当を出す。悪くない」
冬木 「は、ハイ！」
永峰 「ただ、休みが減る。月、３、４日ってとこかな」
冬木 「ハイ！いいです。人並みの暮らし目指しているもんです」
永峰 「そうか、じゃ、頼む。身体には気を付けるんだよ。夜勤があるからさ、そのうち慣れるよ。期待してるよ」
　　行く。
冬木 「ハイ！」
　　後ろ姿に一礼。
　　カーゴ車を軽快に押して行く。
　　暗転。

◯冬木宅・表〜マンション廊下（朝）
　　各ドアが並ぶ長い廊下を、
　　下手から上手へ、
　　意気揚々と帰ってくる冬木、
　　手には紙袋。
　　ドア前で鍵を取り出した時、
　　ドアが開く。
夏実 「あっ！お帰り」
冬木 「只今。今から」
夏実 「そう。ゴメン、寝坊しちゃってさ。ゴハン、適当にしてくれる」
冬木 「そうか……うん、判った。でさぁ…」
夏実 「あのう……」
冬木 「何？」
夏実 「そっちは？」
冬木 「いいよ、先に」
夏実 「……ちょっと、２、３分、いい？」
冬木 「ああ」
夏実 「あ、いいわ、別にいいの。もういいわ。やっぱ、急いでるから。で、そっちは？」

冬木 「ジャジャーン」
　　紙袋の中からシャンパンを出す。
夏実 「シャンパン」
冬木 「うふふふふ、今度、乾杯しよう」
夏実 「どうしたの？」
冬木 「いいことあったんだ」
夏実 「フーン……どんな？」
冬木 「今度、ゆっくり話したげる。急いで
　るんだろ」
夏実 「ええ、そうね。分かったわ」
冬木 「そん時、君の話もゆっくりと」
夏実 「いいの、もういいわ」
冬木 「そんな事云わずにさ。今度、二人休
　みの時、必ず。じゃ、人並み目指して、頑
　張ってネ。僕も、グッスリ寝て、エネル
　ギー補充さ！」
夏実 「……行ってきます」
冬木 「ああ、気を付けて」
　　入いる冬木。
　　重い足取りで進む夏実、
　　立ち止まり、振り返るが、
　　もう、冬木は居ない。
　　廊下を進む。
　　暗転。

◯マルマルストア・在庫室（数日後）
　　俯き加減の夏実、
　　口をモグモグ、ブツブツ云いながら
　　作業を行っている。
　　明らかに、以前の夏実とは違う。
　　見ていたサーヤ、
　　戸惑いながら声を掛ける。
サーヤ「あの〜、だい、じょうぶ、ですか」
　　夏実、顔を向ける。
夏実 「（げっそり）ああ、あっ、あ、何と
　もない、大丈夫、大丈夫よ」
サーヤ「これ、終わりました（伝票出す）」
夏実 「ありがとう」
　　受け取り、作業に戻る夏実。
サーヤ「あの〜、次、何しましょうか？」

夏実 「いいの。もう一人で大丈夫。帰って
　いいわ。ご苦労さん」
サーヤ「はい。それじゃ、お疲れ様でした」
　　入れ違いに店長入って来る。
店長 「安西くん」
夏実 「（ビクッ！と一歩退く）」
店長 「あんな、食器洗いのスポンジ一箱、
　たわし１ダース、化粧水６本、多いねん！
　どうしたんや安西くん！」
夏実 「すみません」
店長 「毎度毎度、すんませんとちゃうやろ。
　反省してるんかいな。ちゃんと反省してち
　ゃんとやってや。ほんまに。早よ直してや」
夏実 「アー、はい、すみません」
店長 「ほんとにどないしたんや、安西くん」
夏実 「あ、あ、あ、なぜか、その、あ、記
　憶が、あの、パッと消えて……」
店長 「えっ、なんてェ！本気で云ってるんか。
　ほな、あかんやん」
夏実 「は……すみません」
店長 「またまた。すんませんちゃうやろ。今
　頃なんや！早よう、云ってくれな、アカん
　やろ！一遍、病院行って診てもらわなあか
　んちゃうん」
夏実 「えっ……え、えぇぇ……」
店長 「えっ、ちゃうやろ、あんたのことやで、
　しっかりしいや」
夏実 「ええ」
店長 「あんな、今度やったら、給料から引く
　でぇ。ほんでやな、このままやったらカッ！
　（首切りの真似）やで。終わりや」
夏実 「……」
店長 「しゃあないんちゃう、こんな状態やっ
　たら。悪いこと云わん、早よ、病院行き」
夏実 「……」
店長 「前、ちゃんとしてたやん。どないした
　んや、ほんまに」
夏実 「……（涙目）」
店長 「頼むで」
　　と、出て行く。

間。
が、ゆっくり戻ってきて、
店長 「仕事抜きやねんけどなァ……ちょっとは力になってもええんやで」
夏実 「ええ……大丈夫です」
店長 「ちょっと、言い過ぎたわ。すまん。可哀想なことしてしもたな。ゴメンやで。私な、私……」
詰め寄って行く店長。
夏実 「（後退り）わ、わたし……」
店長 「……一度、君と」
夏実 「！！」
店長 「あかん、あかん、ええオッパイしてるわ」
夏実 「店長！ダメ！」
店長 「もう、アカん、タマラんわ！」
飛びかかり、胸を弄り、顔を埋める。
夏実 「キャー！！！」
力一杯、押し退ける。
店長 「ハー、ハー、ゴメン、我慢出来んようなってしもたんや。ゴメン、堪忍な」
と、立ち去る。
一間。
蹲ってる夏実……。
懸命に立とうとしている。
そこへ、サーヤが戻って来る。
気付いた夏実、
精一杯の力でなんとか立ち上がり、
夏美「サーヤちゃん……」
サーヤ「(見つめて)安西さんのこと気になっちゃって」
夏実 「あー、そう、ありが……」
涙が零れ落ち、泣き崩れる夏実。
サーヤ「安西さん……」
暗転

◯凸凹物流センター・仕分エリア（夕刻）
いつもの様に、
積んで積んで、次へ次へ、ガラガラ、
ガラガラと進む冬木。

突然、立ち止まる冬木、
カーゴ車に凭れ掛かり、
体勢を崩さずジーッと動かない。
暫くして、ゆっくり体勢を戻し、
再び、次へ次へと。
×　　×
時間経過、深夜。
冬木、次から次へ、
ガラガラ、ガラガラと進んでいる。
と、立ち眩み、しゃがみ込む。
同僚の佐々木（３８）が気遣う。
佐々木「西さん、大丈夫ですか」
冬木 「ちょっと、疲れただけで…平気です」
×　　×
時間経過、早朝。
ガラガラ、ガラガラ～と、
天を仰ぎ、カーゴ車を押し放ち、
崩れていく冬木。
集まる佐々木ら仲間。
やって来た、
永峰 「西、西、どうだ、判るか？」
ぼんやり空いた目の前で手を振る永峰。
冬木 「……あ、ああ……永峰さん……」
永峰 「無理するな。休め」
冬木 「は、は……いえ」
永峰 「佐々木、連れてってやれ」
佐々木、冬木の介添えをし、
その場を後にする。
永峰 「……やっぱ、ダメか」
暗転。

◯ある一隅
朝。
上手に病院、下手には公園。
の、ブランコが揺れている。
下手から重い足取りの夏実が来て、
病院の前で立ち止まる。
虚ろな目が宙を彷徨い、
やがて、ブランコを捉える。
夏実、ゆるりとブランコに座り、

微かに揺らす。
暗転。

夕方。
上手から来た冬木、
病院を通り過ぎた時、
再び、立ち眩みに襲われ、
よろけて、ブランコの鉄柱に凭れ掛かる。
暫くして、
治まり、顔を上げると病院が目に入る。
冬木 「……」
暗転。

◯冬木宅・ダイニングキッチン
片隅、
膝を抱え縮こまってる夏実、震えている。
夏実 「カイリ、セイ、ケン、ボウ（解離性健忘）……うん、うん、うん、うん……もう、いや」
仕事先の商品（洗剤、シャンプー、スポンジ等買わされたモノ）が散乱している。
一間。

夕方から夜へ。
月明かりが差し込む。
時計のチックタック音。

帰ってきた、
冬木 「夏実」
電灯スイッチ入れる。
（夏実は冬木の死角）
散乱状態を見て、
冬木「夏実！夏実！……」
慌てる。
ビクつき、より一層縮こまる夏実。
冬木 「夏実、なっ！」
隅に固まっている夏実を見つけ、
途惑う。
夏実 「（目を逸らす）」
冬木 「（歩み寄り）どうした？」

夏実 「（答えない）」
より硬く硬く縮こまっていく。
冬木 「夏実、どうしたんだ？」
冬木、抱き寄せようとするが、
抵抗する夏実。
冬木 「どうした、どうなったんだ、何があったんだ？」
夏実 「ううううーん（首を横に否定）」
冬木 「夏実！」
夏実 「……」
冬木 「夏実」
夏実 「……いい、いいの」
冬木 「な、なに、云ってるんだ」
夏実 「これ、私の問題だから」
冬木 「だから、何だ、俺たち夫婦……」
夏実 「（目を向ける）」
冬木 「（呟く）夫婦……いや、そんなことより……」
夏実 「(振絞る)これ、ゴッコでしょ(微震)あなたには関係ないことよ」
冬木 「ゴッコ？そうだよな、ゴッコだよ！でも、今はどうでもいいんだ。ゴッコなんか。それより、どうしたんだ」
夏実 「お願い。ジーッとさせておいて」
冬木 「そんな……」
夏実 「このまま……（涙が滲んでくる）」
冬木 「でも……」
夏実 「……今更……」
冬木 「いまさら……何だよ」
夏実 「ゴッコだもんね。ゴッコ。これはゴッコ」
冬木 「そうだよな、ゴッコなんだ。これは、やっぱゴッコなんだ。でさ、そのゴッコで、どうなったんだよ。君はどうなったんだよ！君は！安西さん」
夏実 「もうじき、治りますから。このまま、ジーッと……」
冬木 「ジーッと……ゴッコ……」
夏実、急に冬木を押しのけ、
飛び上がる。

夏実 「ハー、スッキリした。もう大丈夫。ゴ
メンね、冬木さん。今の芝居どう？上手だっ
たでしょ？」
冬木 「芝居！何、云ってんだ！」
夏実 「久し振りだったから、芝居なんて……」
と、云いながら涙が溢れ出てくる。
夏実、見られないように、
テキパキと片付け始める。
冬木、肩を掴み、振り返らせる。
冬木 「なんだよ、その態度！」
俯いて黙っている夏実。
冬木 「冗談じゃない！本気でやってるのか」
夏実、返答なし。
冬木 「顔、上げろ」
反応なし。
冬木、手を振り上げる。
冬木 「このー！」
夏実、顔を上げる、
涙でグショグショ。
冬木 「ハッ！（歪む）」
再び、夏実が一変、
縮む夏実、震え出す。
手を下ろす、
冬木 「……なつみ……」
夏実、片付けていた商品に当り散し、
投げ付け、叫び出す。
夏美「何で、何で、私が、こんな目に…」
冬木、落ち着かせようと止めに入るが、
バネ仕掛けのバネが切れた様で
なかなか止められない。
夏実 「怖いの、怖いの、とっても、怖いの…」
立ち竦んで喚き続けている。
冬木、夏実を引き寄せ、
赤ちゃんをあやす様に優しく包み込む。
泣き喚き抵抗していた
夏実が静まっていくー。
夏実 「私、ダメなの。私、昔に戻るの。怖い
の、仕事が怖いの、人が怖いの。怖いの。
仕事、出来ない。人、出来ない……」
冬木 「（囁く）静かに、しずかに」

静まっていく空間。
……ピポピパポと未来音が
微かに響いてくる。
冬木 「（囁く）判った？」
夏実の頭を両手で包み込む。
ピポピパポは
一定のリズムで流れている。
目を閉じ浅い呼吸の夏実、
微睡んでいる。
冬木 「もう、大丈夫」
自然に頷く夏実。
冬木 「そのまま、ジーッとしててジーッと…」
ピポピパポッ、ピポピパポッ（音）が
狂ったように錯綜する。
グワングワン、
ピボビバボブワンビボーッピポパビポ！！
暗転。

〇夏実の心の中（記憶の去来）
舞台中央（空舞台）、
夏実が不安げに辺りを伺っている。
夏実 「……」
上手からよし子、続いて、店長が夏実に
密着し、順次、
よし子「またやったの！もういい加減にして」
店長 「勘弁してくれ。いつまでかかってるんだ！」
と罵倒して、下手に去っていく。
夏実 「ウウーーン、ウウーーン」
どんどん縮こまっていく夏実。
暗転。

穏やかな声が夏実を包む。
と同時に、
暖色系のスポットが夏実を照らす。
父の声「なっちゃん、おいで、こっちだ……
凄いだろ」
なっちゃん声（幼少時）「ウワーッ、海が光っ
てる」
ルンルンルン、
立ち上がり、高く高く伸び上がる夏実。

軽快だ。スキップして駆け回る。
母の声「空が真っ青。あらららら、カモメ！鳴い
てる」
父　「ここで弁当にしよう」
母　「そうね。そうしましょ」
なっちゃん「ワーイ、卵焼き！」
心地良い時間！
を、劈く衝撃音、ブレーキ、破壊、衝突、
サイレン音が錯綜。
光が消え、闇となる。
緑の薄明かりが舞台を包むと、
そこには、耳を塞ぎ、逃げようともがく、
夏実が居る。
が、手足が動かない（金縛り）。
父の声「ごめんよ、ナツミ」
母の声「もう眠いの。ごめんなさい、ナツミ」
ー間。

一変して始業開始のベル音、
リリリリーーー〜ン
青白い蛍光色に一変。
夏実 「！？」
辺りを見渡す。
上手からみどり、続いて、よし子、店長が
夏実を囲み、順次、
みどり「グズグズしてないで早くして、数合っ
てるの！」
よし子「アンタ、ウチにツケ廻さないでよ」
みどり「えっ、また、間違えたって！」
店長 「毎度毎度、すんませんちゃうやろ！これ
以上、困らせんといてーな」
とネチっこく諭し、下手に去っていく。
夏実 「ウウーーン、ウウーーン」
縮こまった夏実。
懸命に立ち上がろうとするが、
何かに押さえ付けられている様で
全く動けない。もがくだけ。
暗転。
×　　×
舞台中央、

夏実、発声練習。
夏美 「アーアーアーアーアー、イーイーイーイーイーイー……」
伸びやかに、爽やかに、謳っている。
下手より冬木、登場、夏実の傍に立ち、
冬木「アーアーアーアーアー、イーイーイーイーイーイー……」
見つめ合い微笑む。
が、
それを、突き破る、
あの職場の声が響く。
よし子声「間違い、間違いって、アンタ、反省してるの。口だけでなーんもしてないんじゃないの」
冬木、慌てて退場、
夏実は途惑うが、
そんな声をよそに、
無心に発声を続ける。
夏美「ウーウーウーウーウー、エーエーエーエーエー……」
みどり声「ったく。それで、平気なんや。信じられんわ、ほんと、しっかりしてよ」
店長の声「このままやったら、クビやで」
夏美「オーオーオーオーオー……」
そして、静かに朗読を始める、夏実。

『顔』　高村光太郎
「顔は誰でもごまかせない。顔ほど正直な看板はない。顔をまる出しにして往来を歩いている事であるから、人は一切のごまかしを観念してしまうより外ない。いくら化けたつもりでも化ければ化けるほど、うまく化けたという事が見えるだけである。一切合切投げ出してしまうのが一番だ。それが一番美しい……」
暗転。

◯劇団の稽古場（回想）
上、下手側に、
それぞれ学校で使う机と椅子が２セット

並んでいる。

上手の夏実、起立し、
語り始めるとスポットが当たる。
夏実 「安西夏実、３９才。芝居に夢中です。とっても楽しく、我を忘れます。というか、我を忘れるために必死なのです」
スポット消え、下手にチェンジ、
冬木起立し、
冬木 「西冬木、４２才。取り柄なし。恥ずかしながら、短時間のパート、ダブルワークで食い繋いでいます。情けない私ですが、芝居で人生、助かっています」
× ×
交互に発声が始まる。
「アーアーアーアーアーアー、アイウエエオアオ、カキクケケコカコ……」
二人向き合い、
「オーーイ」
「ヤーーイ」
「ヤッホー」
身体振りも交え、
「この高塀に竹立てかけたのは、竹たてかけたかったから、竹立てかけたのです」
「イライラするから笑われ、テレるからからかわれ、ダラダラするからあなどられるんだよ」
夏実 「では、さぁ、行くわよ」
冬木 「レッツ、アクション！」
その時、
またまた、
始業開始のベル音がつん裂く、
リリリリーン！
２人の動きが止まる。
（ストップモーション）
スポットは夏実だけを捉え、
周りは真っ黒。
みどり声「安西さん、休憩時間は終わり。練習、止めなさい。まったく、仕事もそれくらい、一生懸命やんなよ！」

夏実が抵抗している。
夏実 「ウーン、ウーン……」
よしこ声「やんなさいよ。出来るんでしょ。
早く、やんなさいよ、やんなさいよ！」
夏実 「ウーン、ウーン……」
店長 「アカん、アカん、もうタマラん、安
西くん、頼むわ……おっぱい、ほんに、
おいしそうやんかーー」
はじめて、声が弾ける。
夏実 「……ウルサーイ！その声！黙れ、黙
れ、黙れ！！」
舞台、
パーーーッと明るくなる。
反対側に
若い劇団員・佐藤サユリ(２２)が
項垂れている。
夏実、彼女に向かって怒り出す、
夏実 「……ったく。違うのよ、違うの、そ
うじゃないの。解んないの。何辺、云っ
たら判るの？」
サユリ「あのー」
夏実 「待って！今、私が喋ってるの。判っ
た！私の芝居の邪魔しないで。何、あの
リアクション！足、引っ張らないでよ」
夏実 「才能無いんだから、辞めたら」
堪えてるサユリ。
夏実 「それがいいと思うわ」
そこへ、冬木が来る。
冬木 「もういい！云い過ぎだ！」
夏実 「できないんだから、辞めたら」
捨て台詞で去っていく。
サユリを一瞥して追う冬木。
冬木 「安西さん！謝るんだ！」
ー暗転。

◯舞台（ファーストシーンへ戻る）
舞台中央ーーー。
夏実 「もう、すべてやり終えたんだ。これ
からやるべきことは何も無い。な、ん、に、
も、な、い。生きることに意味はない。生

きるべきか、死ぬべきか……」
”考える人間”風に腰掛ける。
演出家の声が重なる。
演出家声「安西さんには休んでもらって、今回の配役はこれでいく。以上」
夏実の考えるポーズが、
頭を深く抱える姿に。
演出家声「最後に一つ。ここは、アマチュアの劇団だ。うまい人もいるが、そうでない人もいる。芝居が好きで楽しいから集まる。そういうトコロだ。月並みな云い方だが、皆んなで楽しく騒いでリフレッシュできる。そんな空間が当劇団の目的だ。ストレスを溜めるところではない」
真っ暗に落ちるー。

◯元の冬木宅・ダイニングキッチン
ー明るくなる。
夏実の頭をやさしく包んでいる、
冬木 「（囁く）でもさ、頑張ったんだからもういいさ」
夏実 「（頷く）」
冬木 「まだまだ、未来があるさ」
夏実 「（大きく頷き、微笑む）」
冬木 「人並みになるって大変だね」
夏実 「ええ……」
冬木 「もう、ゴッコは止めよう」
夏実 「（小さく頷く）」
冬木 「どう、落ち着いた？」
夏実 「ええ。でも、頭はスッキリしてるんだけど、何か違う感じがするの」
冬木 「（呟く）うまくいったんだ」
夏実 「！？えっ、うまくって……何、何云ったの？」
冬木 「うまくいったんだ」
夏実 「うまくって？」
冬木 「吐き出したんだ。良い事も悪い事も、全て」
夏実 「あなたは……」
冬木 「西、西冬木だ」

夏実 「西、冬木」
冬木 「地球に捨てられた西冬木」
　　ピポペパポが微かに響いてくる。
夏実 「ううーん、違う……私の冬木さん、西冬木さん」
冬木 「ありがとう」
夏実 「ゴッコ止めて、このままずーっと一緒に……いいんじゃない、だからさ……ゴッコ止めようって、そういう事なのね」
　　冬木、夏実の口を制し、
冬木 「（頷き、首を振る）」
夏実 「何？」
冬木 「ゴメン！」
夏実 「何が？」
冬木 「何と云うか…こっちで云う癌なんだ」
夏実 「ガン……（笑い出す）ゴメン、アナタも癌になるんだ。でも、簡単に治せるんじゃないの。冬木さんなら何でも出来るんでしょ（今では泣き笑い）。ピピピピーッてイチコロなんでしょ」
冬木 「……」
夏実 「どうしたの？」
冬木 「……」
夏実 「イヤだ……何？何なの」
冬木 「ゴメン。もう、それは、できない」
夏実 「何、何云ってるの。何なの、それ！どういうこと……」
冬木 「宇宙に戻る。癌を治す。そして、君を救う。どれか一つしか出来ないんだ」
夏実 「それって……やめて、やめて、そんなの……なんで、なんで、救うの、私なんか。救わなきゃいいのに。何なのよ、それって。アナタが居なくなったら、私は、また、一人ぼっち……なんでなのよー」
　　冬木、夏実を抱きしめる。
冬木 「……」
　　夏実、冬木を叩きながら、
夏美「アナタは、バカよ、バカよ、宇宙一バカよ。バカ、バカ、バカ……」
　　なされるままの冬木。

夏実 「（見つめ）アナタはどうなるの？」
冬木 「忘れたのかい。僕も芝居が好きって
　ことを」
　　冬木、夏実を座らせ、
冬木 「そう、いろんな人になれる。医者、
　政治家、サラリーマン、実業家、職人、
　刑事、犯罪者からロボット、アンドロイド
　まで、なんでも。それに女性にだって、そ
　して、宇宙人にだってなれる」
夏実 「異星人じゃないの」
冬木 「それに、君の恋人にだってなれた」
夏実 「そして、私を救って、くれ……」
冬木 「……」
夏実 「私と……過ごせる時間は？」
冬木 「だから、早く君と一緒に芝居をしたい」
夏実 「判った、判ったわ、だから、あなたと
　一緒に居る…ううん…地球に居る…生きて
　る、生きて、こうして私と喋ってる時間！
　その時間、どの位残ってるのよ！」
冬木 「（首を振り）わからない」
夏実 「どうして！異星人でしょ！その位、判
　るんでひょ……ぞん・な・ん・ん……（もう
　言葉になっていない）」
冬木 「半年くらいかな、だんだん、身体が動
　かなくなるんだ」
　　ピポペパポが高らかに響き、
　突然、止む。
冬木 「その時、君の居るこの地球の土にして
　くれ」
　　夏実、身体全身で
　この現実を否定している。
夏実 「ウウウェウェーーウェーンン」
　　暗転。

◯舞台（２マルチ）
　　上手半分はマルマルストアの
　　商品ディスプレイホール。
　　下手側は凹凸物流センターの
　　パレット積みの倉庫エリア。
　　交互に展開する。

×　　×
上手の夏実、商品チェックをしている。
店長、来て、
店長 「どうや？」
夏実 「順調です」
店長 「そうか……安西くん、ほんまにありがとう。こんな、俺を許してくれて」
夏実 「いえ、あの、私こそ……」
店長 「いいや、いいや。すまんことしてしもて、情けないわ。まぁ、ぼちぼち頑張ってえや」
立ち替わり、サーヤ来て、
サーヤ「安西さん、ぼちぼちやで、わからんことあったら、聞いてな！」
夏実 「あら、ま！ウフフ、サーヤちゃんと一緒、５、６時間がベストコンディション！」
サーヤ「いいじゃん！それでも、働けるんだからさ！」
夏実 「ま！ウフフ」
上手のライトは消え、
下手の凹凸物流センター、動き出す。
永峰が冬木に椅子を勧めている。
永峰 「どうぞ」
冬木 「（座る）」
が、すぐに立ち上がり、
冬木 「……あのう、やはり、ムリですか？」
永峰 「体の事考えたら、この仕事はキツイ。君は感じてないだろうが、私には判る」
冬木 「！……」
永峰 「もう、健康じゃないんだ。体が受け付けなくなる。多分」
冬木 「でも、行けるとこまで……」
深々、頭を下げる冬木。
永峰 「すまん！それは、ムリだ。先が判ってるんだ。ウチの会社ではムリだ。それにだ、もう、昼間の空きは無いんだ。詰まっている。じゃ」
永峰、去って行く。
冬木 「(再び、深々と)ありがとうございました」
ゆっくりと頭を上げる。

と、涙が込み上げている。
冬木のスポットになる。
冬木 「（目を瞑り、念じる）……」
あのピポパピポ、ピポパピポが流れる。
冬木、念じている
ピポパピポ、ピポパピポ……
冬木 「（目を開き、溜息）ダメだ！交信できない。メッセージが送れない……ダメだ！クソーーッ！ヘルプミー、ヘルプミー、俺は死にたくない……」
暗転。

◯舞台（発声～芝居稽古～本舞台へと）
夏実、冬木が先程と同様、
各々のセットの中央に控え、
交互に発声練習、始まる。
「アーアーアーアーアーアー、アイウエエオアオ、カキクケケコカコ……」
夏実 「殺人者って云う映画知ってる？」
冬木 「いいや」
夏実 「私は毒なの。自分にとっても、周りの皆にとっても」
冬木 「そんなこと無いって！」
夏実 「フフフ、映画よ」
冬木 「じゃ、これ。ジャズシンガー、お楽しみはこれからだ」
夏実 「じゃ、サンセット大通り、セリフは必要ないわ。私たちには顔があったから」
夏実 「自分が見つめている自分」
冬木 「他人によって違う自分がいる」
夏実 「えっ！こんな自分がいたの？」
二人 「他人が遠ざかっていく。どんどんどんどん……遠ざかっていく。そして、追いかけていく自分。やがて、立ち止まる」
二人、軽いストレッチから肉体表現へ、
そして、タップへと躍動していく。
夏実モノローグ
『異星人と地球人。男と女、２人で始めた最初で最期の２人芝居。連日連夜、キツイ稽古も楽しい時間。２人だけの日々が過

ぎていった３ヶ月後、冬木の体力が日に日
に落ち始めていき、今では半日も持たない。
１ヶ月後の小さな自主公演まであと一息、
必ずやってみせる』
　上、下手の境界を越え、
　二人は縦横無尽に舞台を舞い踊り、
　ミュージカルへと昇華していく。

♬「素直に、生きて、走って、笑って、
泣いて、日々の暮らしで夢を見る。
躓き、傷付き、悩み、踏ん張り、
明日を夢見る。もがき、苦しみ、涙を流し、
枯らした時、夢は消え、ただただ、
何もない１日を求める。遠い、遠い、
子供の頃、無心に遊んでいた、
そんな日々が愛しい。
もう一度、そんな日々に帰りたい」
　暗転。

◯舞台（市民ホールでの本番）
　前シーンを引き継いだ、
　そのクライマックスである。
　スポットが光る。
　傷付き横たわっている冬木を、
　抱きかかえる夏実。
冬木「（掠れ声）わたしは……もう、おしま
いだ……たった一人、残された。あなたは
これから、これからの……無事を祈る……
（果てる）」
　夏実、見つめている。
　震えている肩。
　嗚咽を堪え、顔を上げ、客席に向かって、
夏実「もう、生きることに意味はない。この
世界に一人生き残って、たった一人で何を
しろと云うのだ、愛している人がいるから、
頼ってくれる人がいるから、友がいるから、
家族がいるから、父、母、兄、妹、恋人、
仲間、そう、隣に人がいるから、生きてい
るんだ」
　ースポットがゆっくり消えていく。

間。

舞台全体が明るくなって、
客席に向かって挨拶をしようと、
前に出て行く夏実、
手を繋ごうと横を見るが、
夏実 「！？」
居るはずの冬木が居ない。
ググーッと振り返ると冬木は
先ほどと同じ状態で
そこに、横たわったままである。
夏実 「！！！」
駆け寄り、
夏実 「冬木さん、冬木さん、冬木さーん」
動かない。
そこには、息絶えた冬木。
無我夢中に抱きかかえる夏実。
暖かい涙を落とす。
ー暗転。

◯一枚の張り紙（オーディション公募）
レッドカーペットが敷かれた階段の
劇場前、
舞台中央、
大きなオーディション公募案内版、
『異星人が言った、
芝居より楽しく生きようよ！』
が釣り下がっている。

夏実モノローグ
『私には人並みの生活はできなかったけれど、芝居という夢を勝ち取るため、残りの時間を生きて見せます』
夏実は劇場に入っていく。
雪がチラホラ落ちて来た。
アナウンス「まもなく始まります」
ピポパピポ（未来音）が立ち上がり、
幕が降り、
暫くして、登場人物が勢揃い、
その中には、勿論、冬木もいる。

	一同、客席に挨拶を交わし、 最後の幕が閉じる。 終わり 2025/02/16